

緒論



中医学における中医病因病機学とは、疾病の発生・発展・伝変・転帰のメカニズムと法則性を明らかにする学科である。同学科の内容には疾病の病因や、発病・病機などに関する分析が含まれている。その方法論は、古来からの臨床実践と観察から得られたデータに基づき、かつ陰陽五行と天人相応などの学説を指導要綱として導かれたものである。理論的には、臓腑経絡・気血津液などの概念が基礎におかれているが、重視されるのは人体の有機的な統一性と、個々の現象との関連である。

中医病因病機学とは、中医弁証論治において理論的な基礎となるものであり、高度に完成された学理体系をもつ学科である。

1 中医病因病機学の特徴

中医病因病機学の主要な特徴を以下に掲げる。

1. 中国古代哲学思想の影響

中医理論体系では、中国古代哲学と医学的な実践とが相互に影響しあうことが、重要な形成要因となっている。したがって病因病機学にも、中国古代哲学の教義が色濃く反映されている。例えば『内経』にみられる疾病の認識論や方法論原則、陰陽五行学説、精気神学説、気一元論思想、および総体観念（天人相応）などの理論は、その大部分が、秦以前と漢初の哲学思想を起源としている。わたしたちは現代的な観点から中医の病因や発病、病機を分析するだけでなく、古代哲学と中医理論の相補関係を前提として認めた上で、病因病機学の形成と発展を理解しなければならない。

2. 隣接諸科学・思想の影響

中国古代には、すでに自然科学が一定の発達をみており、それは医学分野にも大きな影響をおよぼした。たとえば「人と天地とは相応ず」という観点は中医病因病機学の大きな特徴の1つだが、この観点から導かれる季節・歳気と発病との関係、昼夜の変動と疾病の変遷との関係、および地理環境が人体の疾病に及ぼす影響などといった理論には、明らかに古代の天文学や気象

学、地理学の影響が認められる。また中医病因病機学における情志致病説と病理体質説などは、古代の心理学や体質人類学の影響下に形成されたものである。古代における多くの学問の相互浸透が、中医病因病機学の形成と発展を促進し、後代にその内容の完成を導いたのである。

3. 総体性原則の強調

人とは自然界全体の一部であり、また自然界と人とは有機的に統一されている。この総体観に基づき、中医病因病機学では人体の疾病の発生と、伝変・転帰は自然変化法則の影響と制約を受けざるを得ないということを強調している。例えば、『内経』に著されている、「春には風病が多く、夏には暑病が多く、長夏には湿病が多く、秋には燥病が多く、冬には寒病が多い」といった法則や、『傷寒論』が述べている「六経病の解せんと欲するの時」などは、いずれも人と自然との総体観から導かれた法則である。一方、中医学の総体観とは、人と自然の統一性を示すにとどまらない。人と人類社会全体も1個の総体であり、社会的な要因は人類の疾病の発生と発展に対して重要な作用を及ぼすと考えられているのである。『内経』のいう「先富后貧、先貴后賤」といった発病メカニズムは、特殊ではあるがその一例である。現実世界と周囲の環境に対する人間の反応は、「情志活動の過不足」として現れるが、これは人体に疾病をもたらす場合がある。『内経』では、さまざまな情志の変化が臓腑を損傷し、また病変を作り出すことが指摘されているが、これは人と社会とを総体性においてとらえる観点を表現したものである。また人間それ自体も1個の有機的統一体であり、人体各部の病変とは実際には総体の病変が局部的に表れたものである。『内経』中にある「臓腑相関」や「形神合一」、「人身一小天地」といった法則には、人体の総体性の観点が表されている。

中医病因病機学は、総体論原則という指導的な理論のもとに展開されるものであり、具体的な各種病理概念の認識においては、臨床観察を基礎として疾病という状況下にある人体の機能変化を概括していくものである。つまり、局部の形態の変化や損傷といった現象のみを単純に取りあげ、その分析に終始するものでは決してないという点に、大きな特徴が求められるのである。

2 中医病因病機学の研究および任務

中医病因病機学の研究が担う任務とは、弁証唯物主義と中医基本理論の指導のもとに、疾病の発生・発展・伝変・転帰のメカニズムと法則を研究、それによって疾病の本質と内在的な変化を明らかにし、疾病の予防と治療を指導することである。以下に具体的に述べる。

1. 中医学の病因と発病メカニズム

中医学の「病因」という概念には非常に広範な内容が含まれている。例えば、自然要因、生活要因、生物要因および体質要因などである。病因というもの本質的な概念と発病の特徴を研究することから、疾病の発生と形成における人体のメカニズムが明らかにされ、また一病多因・一因多病、および同病異因・異病同因などといった中医病因学説特有の観点が提出されている。同時に、中医学の発病に対する認識を研究することによって、各種病因の侵入経路と発病条件を明らかにすることができ、それによって発病要因が人体にどのように作用し、人体の陰陽の盛衰と臓腑気血機能の乱れをどのように招くのかを明示、疾病のメカニズムとさまざまな発病類型を提出するのである。

2. 中医病機理論

同理論では、主に各種病機の具体的な病理変化と、その物質的な基礎を研究解明し、各種病機間の相互関係と、伝変・転化の相互関係を検討する。それによって、各種病証の形成・変遷・転帰のメカニズムと法則を提示して、弁証論治のための理論的根拠とする。病機論には、臓腑病機、経絡病機、気血病機、体質病機、痰飲病機、六経病機、衛気営血病機などといった極めて重要な概念が含まれており、中医学の根幹をなす理論のひとつとなっている。

3. 系統的に整理し、絶えず向上を目指す

中医病理学のもう1つの重要な任務は、弁証唯物主義的観点を指導要綱として、真摯に分析研究、臨床実践を行うことによって、先人の成果を十分に吸収してさらに発展向上させることである。それによって、学的体系の内容および形式を規範化して完成させ、系統的理論と完成された内容を備えた1